

多様性と混沌とその先に

— ヨルダンの新聞社を訪ねて —

佐 藤 麻理絵 *

2011 年 8 月、私はヨルダンの首都アンマンにいた。7 月の初めに到着し、約 1 ヶ月が過ぎようとしていた頃、ひとりの老人との素敵な出会いがあった。アラビア語の習得とフィールドワークに明け暮れていた私は、家から程近い市街の中心部に通うのが毎日の日課になっていた。スーク（市場）には新鮮な野菜や果物、香辛料が並び、大勢の人々が行き交う。ここで食材を調達し、地元の人々と何気ない会話を交わし（これがアラビア語の練習にもなる）、家に帰って自炊をするのである。活気のあるスークに一歩足を踏み入れると、まず山積みになったトマトの真っ赤な輝きが目に飛び込み、歩くほどに野菜売りの掛け声が耳に心地いい。

もうひとつ日課となっていたのが、アラビア語学習のために毎日発行される新聞を手に入れることである。スークを抜けてヨルダンで一番古い「キング・フセインモスク」の前を横切り、左に曲がると、中央分離帯に立派なシュロの木を携えたキングフセイン通りに出る。この通り沿いにある郵便局の前に、おじいさんがひとりで切り盛りする新聞の屋台が毎朝出現する（写真 1）。どこから手に入るのか、外国人の私に英語の雑誌を黙って

渡してくれる。もの静かで優しい新聞売りのおじいさんは荷台の上に新聞を並べると、一日中そばの椅子に腰掛けて人々の往来を見守る。界限に顔が広く、色んな人が立ち寄っては挨拶を交わし、新聞を買っていく。そんな新聞屋さんで、いつもどおり新聞を購入していると、ひとりの老人（H 氏）が近づいてきた。足が少々不自由で杖をつきながらゆっくり歩み寄ってきた H 氏は、綺麗な英語で私に話しかけてきた。

英語とアラビア語の 2 ヶ国語を完璧に操る H 氏は、*al-Ghad*（アル＝ガド）紙で、国際ニュースを担当する記者である。ヨルダンでは 10 紙ほどの新聞が発行されているが、最も目にするのは、*al-Ra'y*（アッ＝ライ）と

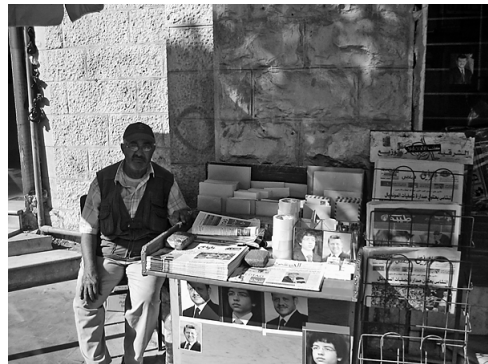


写真 1 アンマンの新聞売り

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

al-Ghad の2紙だろう。ヨルダンのニュースを英語で知ることのできる英字新聞 *Jordan Times* も代表紙のひとつといえる。H氏は、エルサレムの出身で、自分はパレスチナ人だと話した。クウェートで長くジャーナリストをしていたとも話した。ヨルダンにはイスラエル建国や中東戦争の勃発により大勢のパレスチナ人が流入し、人口の50~60%を占めるともいわれる。都市アンマンに多くが居住し、ヨルダンの形成と発展を担うと同時に、時にヨルダン国家を脅かす火種ともなってきた。圧倒的な人数のパレスチナ出身者を抱えながら、隣国を中心に避難民を受け入れてきたヨルダン及び都市アンマンには、さまざまな人が混在している(写真2)。中東戦争に湾岸戦争、レバノン内戦、イラク戦争と、度々発生する隣国での戦火を受けて人々が移動する中、ヨルダンは常に門戸を開き、彼らを受け入れてきた。H氏もクウェートに職を求め、その後湾岸戦争によりヨルダンへと避難し、移動を繰り返してきたのである。

私は新聞屋台での出会いをきっかけにして、H氏の職場である *al-Ghad* 紙の新聞社



写真2 金曜礼拝の様子@キング・フセインモスク

を訪ねた。*Al-Ghad* 紙を発行するのは、2004年に設立された比較的新しい新聞社で、読者の知性を尊重し、真実を知る権利を守ることが社是とされている。H氏は、主に欧米の主要紙に掲載された論考をアラビア語へと訳し、掲載するコーナーを担当している。国際社会で起きている事柄について、世界のさまざまな論者の考えや論評が記されたものを、直接伝えることがそのコーナーの使命なのだという。H氏は英字新聞の論考を一読し、手を休めることなく手書きでアラビア語へと訳していく。途中で詰まることもなく、スラスラ右から左へアラビア語が踊った。大体ひとつの論考を5分から10分程度で訳すのだという。デスクには巨大な英英辞典がひとつ、パソコンはない。

ヨルダンは1921年イギリス保護下において、トランス・ヨルダン首長国として建国された後、1946年に委任統治から正式に独立した。1921年にイギリスが、預言者ムハンマドにつながる系譜をもつハーシム家出身のアブドゥッラー (ʿAbd Allāh ibn al-Ḥusayn) を王に推戴したことから、ハーシム家による世襲王制が現在まで続く。長らく戒厳令下におかれ、政党活動の禁止や議会が凍結された状況にあったが、経済状況の悪化から1989年に22年ぶりの総選挙実施、国内政治自由化へと体制変化が起きた。国内メディアを取り囲む状況にも変化が起き、同時にグローバル化に伴う衛星放送の普及とインターネットの普及により、言論の場は拡大していく。

世界的にみても、新聞業界は危機的な状況にさらされているといえるだろう。ネット全

盛の昨今、電子媒体でのニュース配信が増加し、紙媒体の新聞は苦境に立たされている。IT 化の推進が著しく、「中東のシリコンバレー」とも呼ばれるヨルダンには、ニュースを配信するウェブサイトが多数存在する。ヨルダンの新聞業界もウェブサイトと連携して情報を発信しており、実際に新聞を手にする人は、知識人を中心とした一定の限られた人々が中心である印象を得た。Al-Ghad 紙は、ヨルダンだけでなく中東アラブ地域のジャーナリズムを牽引していくような媒体となることを目指して設立されたのだと、H 氏は語った。

A4 のコピー用紙に手書きで書かれた H 氏のアラビア語訳原稿は、パソコンに文字を起こす係へと渡った。新聞社の中は意外にも整然と片付いており、ガラス張りで見通しの良いオフィスに机が並んでいた。報道、文化、スポーツ等のセクションごとに配置されているものの、特に仕切りがある訳でもなく記者たちは自由に行き来することができる。通路の突き当たりには小さな食堂兼カフェがあり、私が訪れた夕方の時間帯はタバコを片手にシャイー（紅茶）やコーヒーを飲みながら談笑する記者たちの姿がみられた。私もシャイーをもらい、食堂の片隅に座った。隣には「紙面全体を統括する人」と紹介されたベテラン記者が新聞を広げて、右手に赤ペン、左手にタバコのスタイルで記事をチェックしている。いわゆる「デスク」という立場にある人だろう。

一瞬にして彼の周りが記者たちによって囲まれた。デスクの指摘に、記事を書いた記者

本人が意見を述べ、それに食い込むようにして周りが口を開く。活発な議論の輪は、食堂の料理人までをも巻き込んだ。良くも悪くも話し好きで、主張が強いアラブ人気質が大いに感じられるひと幕であった。ひととおり議論が落ち着くと、この新聞社には H 氏のようにヨルダンに「行き着いた」人が多くいる、とデスクは口を開いた。ここはジャーナリズムというプロフェッショナルな人々が集合する場であり、それを誇りに思っているとも語った。

私たちが新聞社を後にする頃には、辺りはすっかり暗くなっていて、新聞社の横にある印刷工場が翌日の朝刊を印刷しているのか、忙しそうに稼働していた。H 氏とその同僚である M 氏と夜道を歩いていると、ビルの大きな広告看板に掲げられたヨルダン国王のポスターが目に入った。町中の至る所で見ることのできる国王のポスターは、お店の中や人々の家の中にも掲げられ、一日に何度も目にする。

その夜、私は H 氏、M 氏とともに夜ご飯を食べに町へ出た。水タバコとともに、H 氏は幼少期を過ごしたエルサレムの話を、キリスト教徒である M 氏はヨルダンのキリスト教事情について話してくれた。夜も更けてきた頃、H 氏は遠くを見つめながら「本当に書きたいことなんて、本当は書けていない」と言った。国王のポスターがあちらこちらに掲げられる君主国家ヨルダンでは、国王批判や政権批判を公然と行なうことはやはりはばかれるのだという。見えない圧力がかかることもある、とも話した。「ヨルダンには

みせかけの民主主義しかない、本当の民主主義はこの国にはない」と話す冷静な口ぶりからは、いろいろな土地を渡り歩いてきた経験がH氏にそう語らせているような気がした。

中東アラブ世界は変動の最中にある。安全と平穏を求めて避難をしてきたさまざまな人々に対し、門戸を開き続けてきたヨルダンには、現在はシリアからの人々を受け入れている。シリア内戦は終わりの見えない泥沼状態

にあり、今この時も人々は戦乱の中を生き、日々尊い命が失われている。ヨルダンという隣国へ僅かな希望を託し、移動する人々の増加が今後も予想される中、この国はどのように舵を切っていくのか。H氏のいる報道の現場では、ジャーナリズムの役割と責任はどのように果たされるのか。多様な人々を抱えるヨルダンの、混沌と先の見えない未来を垣間見たような気がした。

カンボジアの森林保護区滞在記

鈴木 愛*

寒い。眠れない。森の中のハンモックの中で、体を丸める。ダンゴムシならきれいに丸くなれるのに、体の硬い自分はこの程度なのか。小さな生物の美しい姿を羨みつつ、可能な限り空気に触れる面積を小さくし、朝を待つ。調査地の年間最低気温は24度。冬といわれる時期であってもこのような寒さを経験することはないだろうと思い込んでいた。近くに設置されたハンモックもごそごと揺れている。みんな寒くて眠れないのだろう。朝、5時が過ぎた。あまりの寒さにフィールドアシスタントが焚火を始めたようだ。ハンモックから這い出し、マントのように体に巻きつけた毛布ごと焚火に向かう。小さな火を

調査チーム全員で囲んでいると、ようやく待ち望んだ暖かな太陽の光が届きだす。体が暖まる。みんなの顔が明るくなってくる。さあ、朝食を食べて、調査へ出発だ！

プレアビヒア森林保護区

私が滞在している森は、ラオスとタイと国境を接しているカンボジア北部のプレアビヒア州に位置する。プレアビヒア森林保護区と呼ばれるこの場所には、東南アジア大陸の多くの地域で消失しつつある低地林が残存している。生物多様性が高く、地球上の生物多様性保全を考えるうえでも貴重な地域である。特にオニトキ *Thaumatococcus gigantea* という大

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科